



**CSA 2012年 ワーキング・スタディ・ツアー
参加者感想文(寄稿)**

2012 ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

連合本部 連帯活動局 橋本 裕信

まず、今回のワーキング・スタディー・ツアーへの参加にあたり、大変お世話になりました。CSAの渡邊事務局長ならびに団員の皆様、現地関係者の皆様、そして快く送り出してくれた連合本部・連帯活動局の皆様にお礼申し上げます。

今回の日程が私にとって初めての海外渡航ということもあり、見るもの全てを新鮮に感じましたが、中でも特に強く感じたのは現地の皆さんの歓迎ぶりでした。CSAからの支援を心から喜び、感謝してくれている気持ちが、一人ひとりから強く感じられました。報告書に記載された数字や実績からは決して伝わらないこのような生の反応は、何よりも雄弁にCSAの活動の意義を語ってくれました。

また、興味深かったのは「支援を受けている」という現状に対するラオスの方々の考え方でした。現地の方々は「恵まれない人々」と評されることを気にしないと事前に聞いていたのですが、今回お会いした方々との交流では確かにそれを強く感じました。強いて言うならば、「自分たちにできることはすべて行ったが、それでもまだ不足している。そうなった時に恥を感じる必要はないし、他人の手を借りることもまた恥ではない。同じ状況の仲間がいれば今度は私たちが助ける」という考え方。互いの自助努力を尊重しながらも、困っている仲間は決して見捨てない、本当の意味での「助け合い」の精神が根強く残る国民性だと思いました。自国も決して豊かではない状況にあって、昨年発生した東日本大震災の際には「恩を返す番だ」とばかりに救援金を集めてくださった村も多いと聞き、今なお頭の下がる思いです。

そして、こうした自助の精神を持つタイ・ラオスが支援対象国であるからこそ、CSAは限られた資金・物資を有効に活用できるのだと感じました。小学校視察でも、これまでに送られた資材への感謝を忘れず、修繕しながら大切に利用している様子が十分に見て取れました。

続いて印象深かったのは、ラオスの子どもたちの元気な笑顔でした。小学校は勉学に励む以上に、人と人とのふれ合いの場でもあり、もしここに学校がなければ、この輝くような笑顔もなかったのだと思うと、これまでの活動がどれだけ大きく貢献してきたのか実感できました。近年、小学校の増設により生徒の学習意欲が高まり、中学校の数が不足し始めているとの意見もうかがいましたが、こうしたニーズに今後どう応えていく形になるのか、今回の参加者として非常に関心を抱いております。



小学生たちに折り紙指導

以上のように、現地の方々との交流や学校見学が充実していた一方で、救援衣類の仕分け・再梱包・発送などの作業を実際に見学できなかったのは残念でした。ヴィエンチャンの巨大な倉庫に山と積まれた段ボール箱は圧巻でしたが、作業効率のことを考えると「これはうちの組織が送った衣類だ」と未開封の箱を見つけることができってしまう現状は、喜んでばかりもいられない気がしました。

このことについては、バンコックの保管倉庫でも同様で、やはり人員不足で届いた衣類を

すぐに仕分けして再発送するのは非常に難しいとうかがいました。現在は囑託職員の方方で何とか回している状況とのことですが、「衣」という最低限度の生活要素に関わる取り組みである以上、作業をより効率化できる現地主導によるシステムの見直しが、今後の急務であると感じました。

最後になりますが、初の海外で緊張もなく過ごせた最大の要因として、やはり同じ団員メンバーの存在が何より大きかったと確信しています。職や立場は違えど、最終的に目指すところを同じくしている同志の存在は非常に心強く、またメンバーの中でも若輩である私にとって、皆様からお聞きした現場の体験談の数々は大変勉強になるものでした。機会がありましたら、またメンバーの皆様との交流を深めるとともに、今回のツアーでそれぞれが感じたこと、今後取り組みたいことなどを共有し、この先の活動へ繋げていきたいと思ひます。



倉庫内に積まれた膨大な数の衣類ダンボール箱

2012 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UIゼンセン同盟 とりせん労働組合 石川 浩 規

単組委員長より最初に今回のお話を頂いた時、飛行機があまり得意でない私は正直言って参加する前から緊張と不安の毎日でしたが、いざ出発してしまえばあっという間の7日間であり、これも道中お世話になりましたCSAの渡邊事務局長と今回の2012CSAワーキングスタディツアーチームの皆さんのおかげだと感謝しています。

ラオスでは教育省・保健省を訪問し、副大臣よりCSAの活動に対する感謝の言葉を頂き、また国内の教育状況、医療状況を知る事ができました。日本では当たり前に行われている小中高の教育が今なお厳しい状況にあるというラオスでの現実は、漠然とボランティアという言葉だけ使用していた自分にとって、本来のボランティア活動の意味を考える機会を与えてくれました。

中古衣料の保管倉庫では実際自分の組合が送付した箱を見つける事ができ、ちゃんと送った物がラオスの貧しい人々の為に役立っている事が確認できました。

その後CSAが建設した小学校を3校視察しましたが、どの学校でも大変な歓迎を受け、先生や村人たちとの交流は心に響く楽しい時間となりました。また小学生が折り紙教室や綱引きでみせる真剣な眼差し、笑顔はまさに純粹であり長旅の疲れを癒してくれました。未来あるこの子達に何の心配もなく、このまま中学・高校と勉強させてあげたいという強い思いを持ちました。CSAには今後も引き続きラオスにおける教育支援をお願いしたいと思います。自分自身も何らかの形で協力したいと考えています。

3日目の夜にはサンティパーブ高校CSA寮卒業生との交流会があり、大学で自分の目標



ラオス保健省倉庫にて中古衣料寄贈



ホンガム村小学校にて

てとれました。寮生達に教わりながら踊った現地の踊りはツアーの良い思い出です。

当単組では3年前より中古衣料を送る活動に参加させて頂いておりますが、ただ衣料を集めて送付するだけでその衣料がどの様に役立っているのかは、ポスターなどで雰囲気を感じるに過ぎませんでした。今回、実際にその様子を視察する機会を頂けた事は自分にとってこれからのボランティア活動を推進する上で大変貴重な経験となりました。ありがとうございました。

に向かい熱心に専門の勉強をする学生達と話をすることができました。自分も相手も片言の英語でのコミュニケーションでしたが、彼らの思いは十分伝わってきました。自分の語学力の無さを悔いるとともに、彼等にはこれからのラオスの発展を担ってもらいたいと思いました。

ルアンプラバンではサンティパーブ高校寮を視察し、先生や寮生との交流を行いました。おそらく我々に披露する為にわざわざ練習したであろう踊りや演武には感謝の気持ちが見

2012 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UIゼンセン同盟 ホークスタウンユニオン 西 嶋 章 乃

今回このCSAワーキングスタディーツアーに参加してとても貴重な体験をさせて頂きました。私どもホークスタウンユニオンの上部団体のUIゼンセン同盟では、様々なボランティア活動があります。その中でも私たちのような組合員300名もいないようなユニオンで何ができるかといつも考えていたところでした。うちのユニオンではこの中古衣類の活動は以前行っていたようですが、数年動けてなかったことに対し、前委員長より活動したいとの思案を聞いていました。

私の中でも、他のボランティアのように直接現地に行って、活動をするというのは全員が非専従でやっている執行部としても人材はもちろん、費用も厳しい状態で、この活動であればうちのユニオンも微力ながら参加出来るのではと思い、活動を進め始めました。

一連の流れをほぼ1人で行いながら、タイとラオスに行ったことのない私としては暖かい国だろうから毛布や、フリースの洋服などいるのだろうかという疑問を抱いていました。そして送付し、あの衣類は届いて、活用されているのか日々過ごす中でふと考えていた頃にUIゼンセン同盟のフードサービス部会より私たちのユニオンにワーキングスタディーツアーへ参加の話を頂きました。もっと大きな組合がある中、多少気がひけましたが、行きたいという思いが強く、行く前から今後の活動を頑張るといふことで、参加させて頂きました。



ラオス倉庫で救援衣類の贈呈式

参加させて頂いたUIゼンセン同盟の皆様、組合のみんな、職場のみんなに御礼を申し上げたいと思います。そして、個性的なメンバーが多い中、ずっと引率して下さった渡邊さんに感謝してもしきれません。

ラオスとタイでの倉庫で沢山の段ボールを見た時には、感動しました。

実際の行動が形となって異国の地で出逢える。これは、本当行って見れて良かったと思えた瞬間でした。一緒に行ったメンバーは自分の単組が送った段ボールを見つけて記念撮影をしたりしてましたが、私は自分の単組が送った数を知っているし、もう現地へ発送されている分もあるし、見つからないだろうというという思いで、私の仲のいい単組さんの段ボールを探しました。写真を撮って帰ってお渡しし、今後の活動推進へと繋げてもらおうと思いました。多数の段ボールの中から自分の単組の段ボールを探すみんなの姿・見つかった時の笑顔は忘れられません。

中古衣類の活動の他、CSAでは小学校建設をしており、今までに23校も建設されているとのことで、訪問させて頂きました。

校舎はしっかりとしてましたが、テレビで見るような雨風しのげればというような学校でした。先生も足りず、生徒も極端に多く、一つの机に2人座って勉強していたりと日本の学校教育との違いに正直驚きがありました。でも学校で勉強できることが素晴らしいという状況。

日本から来たのでということで、特定の学年にて折り紙を教えました。折っている途中の生徒の笑顔が忘れられません。文字通りキラキラと輝いていました。



小学生と折り紙

そして綱引きをしたのですが、一生懸命！！女の子もシンという民族衣装の制服をまくりあげて勝ち負けにこだわってました。

日本の子供ってこんなことで笑うかな？こんなに一生懸命になることってあるのかな？

と物資が豊かな国だからこそその淋しさを感じ、忘れていたものがあるような気がしました。勉強したいという思いのある子供たちに勉強できる環境をとというCSAの活動は素晴らしいなとも感じました。

そしてラオスやタイは決してぶれず、どこを見ているかといったら、アメリカでもない、ヨーロッパでもない親日という感情を持って頂いて日本を見てくれている。

そうなった時に、日本(日本の大人)ももっと国としての在り方を考えていくべきなのかなと感じました。

そして、今後私たちができる活動を進めていきたいと思いました。

私は、UIゼンセンでも福岡県の専門委員として活動しておりますので、沢山のの人に話す機会を設け、もっと促進していきたいと思えます。早速ですが、組合員数が膨大な単組の代表の方とお話していたら、今まで参画していなかったなので、来年から参画するように動きまわると言って頂きました。



倉庫での膨大な量

人が見る、伝えてその温度で感じるのと、書面での案内の違いを感じました。

そこでこのワーキングスタディツアーの意義があると感じました。

今後の自分のユニオンでの活動を検討する機会となりました。

最後に、私はユニオン活動で知り合った仲間というのは企業は違えど、ベクトルが同じでとても勉強になる仲間だと思ってましたが、それ以上に寝食をともにしたメンバーというのはとてもかけがえのない仲間となりました。まだまだ発展途上中の今後のラオスに期待しつつ3年後みんなでラオスに行くことを誓ったことは忘れませんので、絶対に実行したいと思います。皆様ありがとうございました。

2012 CSAワーキングスタディツアーに参加して

UIゼンセン同盟 大阪ガス カスタマーレレーションズ労働組合 西村 正 雄

今回、当労組から初めて私がワーキングスタディツアーに参加しました。

最初はCSAとは何となく知ってはいましたが、今回のような活動は全く理解しておらずの参加となり、驚くことばかりでした。

訪問先へは最初、ラオスに行きましたが、首都ヴィエンチャンでは都会の様子はありませんでしたが、一步離れると全く舗装がされていない道路や、家ともいえないような住居に現地の方が居住されており、貧富の格差を実感しました。しかし格差があるとは言え、現地の方々は非常に人懐っこく、我々外国人にもやさしく接してくれ、日本との親近感を抱きました。

現地での救援衣類倉庫も見学し、我々の送った衣類が有効に活用されているのと、CSAが立てた学校の見学も行い、小学生との交流も行いました。



ラオスの小学校で子どもたちと綱引き

また、当労組でもこれまで以上に支援活動に協力することを誓うと共に、組合員全員にも照会していこうと思います。そして、今回のようなツアーを沢山の組織に紹介し、更なる支援活動の協力にさせていただきますよう、強く希望いたします。

今回は、貴重なツアーに参加させていただき本当に有難うございました。



ラオスの倉庫で衣類引渡し式、保健省副官房長と

小学校では、校長をはじめ、皆さんの歓迎を受け、バーシーと言うセレモニーを行って我々を迎えてくださり、感激しました。

タイでは、救援衣類の一時保管所を見学し、日本から届いた衣類を分別して梱包しなおすといった様子も見学しました。タイ政府の方々も我々を歓迎していただき、日本との友好を感じました。

今回のツアーで私個人の価値観が変わるのはもちろん、改めて支援活動の必要性を実感した次第です。

2012年 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

基幹労連 JFEスチール知多労働組合 村山長稔

CSAの活動については今回のツアー参加に声を掛けていただくまでほとんど知りませんでしたが、実際に救援衣料活動、学校建設などの事業を視察することができたことは大変勉強になりました。2012年ワーキング・スタディー・ツアーに参加させていただいたことは私にとって、とても感動し大きな財産になりました。今回の参加にあたり声を掛けていただいたJFEスチール労連の各位及び単組の皆さんにお礼申し上げます。

今回のツアーでは各産別からの代表者がメンバーとなっており、結団式の顔合わせでは緊張しましたが、皆さんと話をしているうちに良い雰囲気になり、これからのツアーが楽しみになりました。

バンコク経由で訪れたラオスの首都ヴィエンチャン初日は市内視察を行いました。ホテルチェックイン後、ラオスで初めての食事を市内のラーメン店(結構おいしい)で昼食を取ることになりましたが、移動のバスは店の前に止めてくれず反対車線の路肩へ止めたのでどうするかと思ったら、ガイドさんの指示によりバスを降りて皆で車・バイクの合間をみて横断歩道のないところ横断しました。その後のラオスの町では皆で何度も行いましたが、警察の方が見ていても特に注意はありませんでした。

今回の訪問で特に印象に残ったのはラオスの小学生や高校生の笑顔でした。今回は小学校3校、高校1校の訪問をしましたが、ラオス語が話すことが出来ない私達でも、何とか覚えた言葉、サバイディー(おはよう・こんにちは・こんばんは)・コプチャイライライ(ありがとう)の二言でコミュニケーションが取れたことは嬉しさであり喜びでした。

ラオスでは山間地の小学校を3校訪れましたが、どの村も行く道中の景色は日本の戦前にタイムスリップしたような光景でしたが、そんな中で訪れた現地の村人・子供・先生方は私達を笑顔で迎え入れてくれました。小学校ではサッカーボール・ノートや鉛筆の贈呈式を行った後には、子供たちと折り紙を折ったり、校庭では綱引きをして楽しい時間を過ごすことができました。



小学校への文房具(ノート) 寄贈



子どもたちと折り紙

どの学校でも歓迎の儀式「バーシー・セレモニー」を行ってくれましたが、特に印象に残ったのがルアンプラバンから山間の道を片道約2時間掛けて訪れたホアナ村小学校でした。子供たちと触れ合いのあと村人・先生方によるバーシー・セレモニーを行ってくれましたが、予定外の歓迎を受けて大変な盛り上がりとなり楽しい時を過ごすことができました。最後の挨拶の中で、「自分の故郷みたいに思い、村人たちも家族、親戚みたいに思っていますので、個人でも結構ですので訪問し

て下さい」と聞いた時はCSAの活動が現地で大変に感謝されていることが分かり、再度の訪問を心に思い村を離れました。

最後になりますが、本ツアーのメンバーの皆様、CSAの渡邊様、大変お世話になりました。

2012年 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工労働組合 佐 崎 吉 宏

今回のCSAワーキング・スタディー・ツアーにおいて、現地での訪問や視察を行い、ラオスでの教育事情やCSAで行っている救援衣類を送る運動・小学校建設状況等について、理解を深めることが出来ました。ツアーを通じ、感じたことを2点報告します。

1点目は、「CSAで行っている救援衣類を送る運動」は、ラオス・タイの人々にとっても感謝されていることです。特にラオス北部の支援を必要としている地域では、服も買えない家族も多く、また昨年の6月頃は気温が低かったこともあり、「衣類をいただき非常に助かった」とのことをお聞きし、送った衣類についてはありがたく活用されていることと、今後も「救援衣類を送る運動」の必要性を感じたところであります。



訪問団に対し、先生と村の人々に歓迎いただいた

2点目は、小学校及び高校を視察・交流したなかで、決して豊かでない地域であっても、「元気・明るさ」を持ち、村の人々が協力しながら生活を送っていることです。また、子供達については、素直に感謝・喜びを表現することが出来、私自身が新鮮な気持ちにさせられた感がありました。CSAでは、小学校建設地の選定は、自立支援型の観点から「村人の協力度合い」を考慮して決めており、その事が今回の視察・交流で理解出来ましたし、今後そのような地域・子供を支えて行くための活動の大切さを感じました。

今回のツアーを通じて、支援を受けている地域でも人からの支援だけを頼っているのではなく、なんとか自分たちで協力しながら頑張っていく力に「強さ」を感じましたし、自分たちの将来・夢に向かって勉学に励む生徒の「努力」に対し、共感を受けました。



生徒対抗の綱引きで応援する女子生徒達

CSAの活動は、支援を必要としている地域なら何処でも支援をしているのではなく、「自立するための支援をする活動」であり、改めて理解するところでありました。また、ボランティア活動を行うにあたっては、単なる物資等の支援だけでなく、原点は自分で状況を認識し、自分が何をすべきかを考えることが重要であります。今回のツアーで学んだことは、これからの活動にきっと役立つものと信じております。

最後に、ツアーにおいて、サポートいただ

いたCSAの渡邊事務局長を始め、ツアー関係者・参加者の皆さまに深く御礼申し上げます。
ありがとうございました。

2012 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

基幹労連 IHI労働組合連合会本部 三輪明洋

まずは、この度の2012ワーキング・スタディー・ツアーに参加できたことは、これまでの活動の実績が確認でき、大変貴重な経験となりました。

ラオスの教育省、保健省を訪問させていただき、それぞれ副大臣からの話し合いの中で、優秀な生徒が大勢いるにもかかわらず、学校や先生の数が見えないことや、山間部のインフラ整備、医療機関の不足など、多くの課題があることや他国からの支援の必要性を認識しました。

小学校視察では、3校とも学校挙げての歓迎セレモニーや感謝の言葉をいただき、子供たちの屈託の無い笑顔やはにかんだ表情などに心打たれ楽しい時間を過ごしました。

サンティパーブ高校寮でも同様の熱烈な歓迎を受け、民族舞踊やダンスなどを披露していただきました。小学生や寮の学生たちを見ていると、素直さや明るさ、勤勉さ、将来に対する考え方など、貧困国とはいえ精神的には豊かなで生きる力みたいなものを感じさせてもらいました。

また、このCSAの活動がラオスの人々から感謝され重要視されているのを感じました。

タイでは、ラオスとはかなり違って豊かな国に感じましたが、福祉省での話では山間部はまだ多くの支援が必要との話でありました。



小学校の子どもたちに蛙の折り紙を皆で指導



サンティパーブ高校CSA寮で先生たちと

タイでの救援衣類倉庫視察では、送られてきた衣類を男女、子供、大人などに仕分けがされ、地方に配布されるとのことで、かなり細かな作業がされていることが確認できました。

今回のツアーで全体的に感じたのは、CSAの活動への積極的かつ継続的な参加が必要であると感じました。

最後になりますが、渡邊事務局長をはじめ参加メンバーの皆さんに感謝申し上げます。
ありがとうございました。

CSAワーキングスタディーツアーに参加して

基幹労連 三井造船労働組合連合会 東京地方支部 山中 貴雄

今回の2012年CSAワーキングスタディーツアーは6泊7日の訪問期間で、訪問先はラオス保健省、保健省倉庫、タイ社会福祉省、タイ社会福祉省倉庫、小学校3校とサンティパーブ高校寮を視察し、視察趣旨/内容はCSAの事業活動を会員企業代表の方々と点検し、今後の活動の継続・維持に役立てる、つなげる事を目的とするものでした。今回はラオスを中心に小学校建設、遠隔地の高校生支援の教育支援事業と、ラオス・タイの救援衣類施設を視察し、支援の成果を確認しました。



倉庫で救援衣類贈呈式

CSAの渡邊事務局長はじめ、参加メンバー、現地において通訳・調整をしてくださった関係者のご協力に感謝申し上げます。

初めてのラオス訪問であったが、訪問先の小学生の笑顔や高校生の明るさ等に触れて、皆さん精神的に豊かな印象を受けました。ハード面でのインフラ整備は未だ進んでいない側面



明るいラオスの高校生たち

はあるにせよ、国としての成長というのは、緩やかでも着実に進めていけばいいのではと思いました。小学校や保健省・教育省を訪問し、学校の数が不足していることや教員の不足また一定のレベル確保の面で問題ある点について説明を受け、今後のCSA活動の維持・充実を図っていく必要性を認識しました。

タイでは、日本大使館でタイの経済事情等について説明いただき、日本企業が多数進出し、経済に活気があり安定しているとはいうものの、貧富の差が激しいという話も聞き

ましたので、未だまだCSA活動の維持の必要もあるかと思いました。こちらではラオスとは違ったCSA活動のやり方が有るはずです。

本ツアーを通じて、衣類支援を続けていくことの必要性・支援活動を広げていく必要性を感じました。また自組合・基幹労連が社会貢献活動へどのように取り組んでいくべきかを深く考えさせられるいい機会となりました。関係する皆様に心より感謝申し上げます。

2012年ワーキングスタディーツアーに参加して

JAM リケン労働組合 山崎 友美

「タイとラオスはどうだった？」帰国後、皆が興味津々に聞いて来る質問で、周囲の関心の高さが窺えました。

そんな時、私は「とても勉強になった、とても有意義だった、とても感動した」と答えは

したものの、上手く説明し切れないボキャブラリーの少なさがとても歯痒く、このように答える事しか出来なかった自分自身に悔しさすら感じています。しかし一言では言い表せないのも、単組が2006年から行っていた救援衣類を送る運動に私が実際に携わり始めたのは、翌年の2007年からです。当初からぜひ参加したい！と願っており、今年度、参加の機会を頂けた事は大変光栄でした。

個人的にも行きたいと思っていたラオス。一番の印象は、人々の損得のない優しさと子供たちの笑顔です。小学校では折り紙や綱引きの輪に加わりましたが、みんな本当に一生懸命で、今を楽しく過ごす力を持っている事を強く感じました。あの時、子供たちが見せてくれた意欲に満ちた顔が、帰国した今でも忘れられません。

校舎を始め、机や椅子もとても綺麗とは言えませんし、教科書も揃ってはいないのが実情。それでも子供たちは、不足している物などないのでは？と思わせてくれるほど、明るさと元気さに満ち溢れていたのです。

その後訪問したサンティパーブ高校のCSA寮生も小学生同様に明るく元気で、そして真っ直ぐな高校生たちの姿に驚かされました。寮生が披露してくれた山岳民族の舞踊やテコンドーは本格的で、学業だけではなく、伝統文化の伝承やスポーツにも力を注いでいる姿に感銘を受けざるを得なかったほどです。テコンドーでは寮生が割った板の破片がこちらまで豪快に飛んで来て、そのハプニングに笑いが起こるほど盛り上がりました。飛んできた板を「私も割れるかな？」と試してみましたが、割れるどころかビクともしません。

また舞踊には私達も参加させてもらいましたが、皆が輪になって踊る雰囲気と空気感はとても清々しく、美しい民族衣装と共に、未来永劫も受け継がれて欲しい、残るべき伝統ではないでしょうか。



ラオスの高校生と - 民族衣装に誇りと伝統を垣間見ました
現地に着いた衣類はまず倉庫に山積みになされ、

その手間を考えると長時間の作業になりますが、間違いなく各地に発送されるそうです。また、今までは単なるイメージだけで「暑い国にセーターは必要なのだろうか？ もっと他に必要な衣類はないか」などと思いながら箱詰めをしていましたが、高地の山間部は一日の寒暖差も激しく、特に小学校へ訪問した時に冬物衣類の必要性を実感しました。これも現地



小学生に折り紙指導 - 舟を折って大喜び

さらに寮生は英語や日本語を学んでいるので、踊りを教えてもらうのと同時にお互いの国の習慣の違いを話すなど、直接交流を深める機会が訪れた事は、出発前には予想すらしていない嬉しい誤算でした。そこで彼らと過ごした楽しいひとときはアッと言う間でしたが、私にとっては忘れる事が出来ない、貴重で大切な体験になってくれたのです。

次は、メインの一つである救援衣類です。

多くの人の力が合わさり、必要としている人の元に届いている事を確認して参りました。ダンボールを開けてビニールの袋に詰め替え

に行かなければ分からなかった事の一つです。

これまで単組で行っていた箱詰めに対し、個人的には“単純作業”だと考えていた気持ちもありましたが、今回の視察で本当に衣類を必要としている人たちと直接ふれ合い、「一つ一つの作業に思いを込めて取り組まなければ意味がない」と、新たな気持ちで臨む意味を知りました。

参加前は、正直「支援やボランティアって何だろう？どんな意味があるんだろう？」と、自分の考えがまとまりませんでした。CSAの自立型支援に参加させて頂けた事で、本当に必要とされる支援を理解し、そこに「現地の人々の自立を助け、促す」目的があるという答えを自分なりに導き出せたのです。

最後になりましたが、渡邊事務局長・団員のみなさんには、大変お世話になった御礼を申し上げます。皆さんにお会いする直前には不安を感じ、やはりやめておけば良かったかも……などと悩んだ、未熟な自分が恥ずかしいです。

貴重な体験を得られ、意識改革が出来た事を心から感謝致します。

皆さんと一緒に参加し、そこで得た気持ちと体験を決して忘れる事なく、今後の活動に活かす事を約束させていただきます。

BEST SELECTION



編 集 後 記

今年もお蔭様で無事にワーキングスタディーツアーを終えることができました。参加者は久しぶりに二桁台、女性が2名参加でした。日程は昨年同様、ラオス、タイで1週間でしたが、今年は夜行便を使用することにより、より効率的に関係省庁、大使館表敬、山岳地帯を含む小学校3校、高校寮1校、倉庫各1箇所、CSA寮卒寮生との交流といったプログラムをこなしました。計画した地雷関係訪問が時間的に未達成であったことは心残りでしたが、充実したスタディ・ツアーであったと思います。

今回の訪問で特筆すべきことは、ラオス、タイの両国の各関係省庁、そして各村、各学校において、日本の地震津波災害に対して温かいお見舞いの言葉をいただいたことです。「日本は大震災・津波等で被災したにもかかわらず、私たちに対して支援を続けてくださっていることに心から感謝する」といった親身な言葉を行く先々でいただき、さらに決して豊かではない村の人々がわずかな収入の中から見舞い金を集め、教育省を通じて日本大使館に義援金として寄付してくださったことは、皆様からご支援いただいているCSAの活動が現地で高く評価されていると同時に、多くの人たちが日本を気にかけてくれている証しであると感謝した次第です。

今年のキーワードは「感謝」＝「コプチャイ・ライライ」でした。全員礼儀正しく(組合幹部ですから当然です)まず「サバイディー」と現地の方々に挨拶し、最後に「コプチャイ・ライライ(ありがとう)」、そのお返しは常にすばらしい笑顔でした。一日の最後は「ピアラオ」で現地経済に貢献し、疲れを癒し次の日の活動に備え、日々の健康管理にも務めました。

ラオス、タイの倉庫では衣類が届いていることを確認し、箱に貼られたラオス語/タイ語/日本語の内容シールのおかげで衣類の仕分けがしやすくなった、と評価も得ました。小学校や高校寮では生徒の明るい笑顔で迎えられ、好評だった折り紙教室では、参加者一同での事前の練習も含め、小学生と共に一生懸命に取り組む、といった一面もありました。

今後の目標の一つは、より多くの方々にCSAを知っていただき、活動の啓発に努めることです。そのために、多くの組織の方々に同スタディーツアーにご参加いただき、活動現場を視察していただくことをアピールしたいと思います。

ワーキングスタディーツアーでは、参加した皆様の感動から力をいただいて元気になります。最後に参加者の方々、参加組織の担当者の方々に感謝申し上げます。コプチャイ・ライライ、ありがとうございました。



アジア連帯委員会(CSA) 渡邊ひな子

ラオスの寮卒寮生(大学生)たちと(前列左端が筆者)

2012年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書

発行日 2012年2月

発行者 アジア連帯委員会 (CSA)

〒105-0014 東京都港区芝2-20-12 友愛会館14階

Tel (03)3769-4177 Fax (03)3769-4178

印刷 同栄印刷株式会社

